

ブログ記事からみた新種発見のニュースの受け取り方：徳島県で見つかったアナナムシオイガイを例にして

* 松田春菜^{1,2,5}・田代優秋^{1,3,4,5}

General public's perceptions of the news on land-snail *Cipangocharax ananensis* discovery from Tokushima Prefecture investigated through blog entries

* Haruna Matsuda^{1,2,5} and Yushu Tashiro^{1,3,4,5}

¹ Sanagochi Nature Center, 5-8 Okawara, Sanagochi, Myodo, Tokushima 771-4102, Japan

² Present address: Shikoku University, Furukawa, Ojin, Tokushima 771-1192, Japan

³ Present address: The Aozora Foundation, 1-1-1 Chifune, Nishiyodogawa, Osaka 555-0013, Japan

⁴ Present address: Institute of Regional Resource, 5006-12 Shido, Sanuki, Kagawa 769-2101, Japan

⁵ These two authors contributed equally to this work

* E-mail: hypermastus@gmail.com

はじめに

地域固有あるいは貴重な動植物は、地域活性化に“使える生物資源”と認識されるようになってきた。国内の代表例としてトキやコウノトリといったシンボリックな生物が挙げられよう。その他生物も、例えば、安全・安心や持続可能な農産物の指標である「生き物マーク」（農林水産省 2010）として全国各地で使われている。現在の生態系保全を巡る立場は、これまでの希少性を第一義的に捉えた反省的・不可侵的な保全から、地域住民の暮らしとの関わりを積極的に紡ぎ出そうとする利活用型・共生型の生態系保全へと変遷している。

それでは、人々との関わりを見出す保全はどのようにすればよいだろうか？ 2013年1月、徳島県阿南市で見つ

かった陸産貝類が新種アナナムシオイガイ *Cipangocharax ananensis* として発表された（Yano et al. 2013）。本種はこれまで全く知られていなかったため、地域住民による伝統的、文化的、日常的なかかわりは全くない。つまり、地域住民にとっては、ある日突然、自分たちの地域に未知の生物が出現した突飛な出来事だったことは容易に想像できよう。一方で、この地域にしかない高い固有性や希少性を理由に保全活動への理解と協力を社会全体から地域住民らが一方的に求められ、困惑するかもしれない。陸産貝類は生息場所の消失・改変や環境悪化が個体数の減少に直結するため、保全においては原則的に生息地の現状維持が求められる。本種の生息地は極めて局所的である中で、遍路道となっている場所も含まれている。そうした場合、新種の希少性を高く評価して積極的に保全したいと考える人と、保全の重要性を認識しつつも遍路道としての利活用を強く望む人の両方がいることが想定され、利用と保全の間でジレンマが生じる可能性がある。事実、他地域では社会と地域住民との“受け取り方のズレ”から生じた揉め事が報告されている（例えば、松岡 2009）。こうした新たな関わりが必要となる種の保全においては、地域住民の受け取り方が必ずしも一様ではないことを前提にしたプロセスデザインを行わなければならないだろう。

この保全の初めの一步は、地域住民が生物資源をどのように感じ、理解し、受け止めているかを共有することであろう。これは何も新種発見の場合だけではない。例えば、ある地域で絶滅した生物の再発見事例（田代 2013）や、野生絶滅した生物の再導入・野生復帰させるニュース（本田 2006；本田・山路 2006）なども、地域住民がそれをどう受け取っているかが重要となる。ところが、日本全体あるいは地域全体の雰囲気把握することは方法論的に難しい。アンケート調査といった方法もあるが、即時的に全国の不特定多数を対象として受け取り方を把握しようとする、今回の場合には新種発見のニュースを知っている人にアンケート調査票を配布しなければならず、極めて大きな手間や費用がかかる。こうした課題に対して、例えば全国の日本庭園の評価・感想をインターネット上で書かれているブログ記事を通じて不特定多数から収集したり（伊藤・曾和 2010）、日々更

¹ 徳島県立佐那河内いきものふれあいの里ネイチャーセンター 771-4102 徳島県名東郡佐那河内村上宇大川原5-8

² 現所属：四国大学 771-1192 徳島県徳島市応神町古川

³ 現所属：公益財団法人公害地域再生センター 555-0013 大阪府大阪市西淀川区千舟1丁目1-1 あおぞらビル4F

⁴ 現所属：一般社団法人地域資源研究センター 769-2101 香川県さぬき市志度5006-12

⁵ 共筆頭著者

* E-mail: hypermastus@gmail.com

新される観光情報の網羅的な収集のために旅行者が記したブログ記事を使う手法 (石野ほか 2010) が用いられ、有効性が示されている。このように個人によってインターネット上で語られる情報を利用できれば、簡便性、広域性、即時性、低コスト化が達成される。このほかに、ブログ記事を検索・分析することでニュースを知った人を効率的に把握でき、調査者が想定できないような主観的な意見を収集できる。これによって発見地域内外の主観的な意見を比較することも可能となり、今後、居住地の違いを踏まえた利活用や新たななかかわりのためのメッセージ発信内容に反映することができると考えた。

こうした背景を踏まえて、本研究では次のような前提が想定できた。先に取り上げた新種アナンムシオイガイは、それまでインターネット上では全く語られていない存在である。社会全体が本種を知ることになったのは、新種発見の報道発表がすべての起源となっている。このため、インターネット上で語られる言説を収集すれば、不特定多数の人々が報道を受けてその事実をどのように受け取っているかを把握できる好例と考えた。そこで、個人の意見表明の場であるブログ記事 (三浦ほか 2008) を材料に、新種発見のニュースが誰に、どのように語られているかを分析し、一般的な受け取り方を調査した。また、作成者の居住地情報に基づいて、受け取り方の地域性についても考察を加えた。

方 法

1. アナンムシオイガイの発見の経緯と報道発表概要

アナンムシオイガイは1971年に徳島県阿南市水井町の石灰岩地帯から初めて採集された。当時は、採集場所が近似種クチキレムシオイガイ *Cipangocharax biexcisus* の模式産地と極めて近かったことから、その同種と判断されていた。しかし近年、同所で再び採集され詳しく検討された結果、既知の種とは明らかに区別できたため、2013年1月22日発行の日本貝類学会誌 *Venus* において新種として報告された (Yano et al. 2013)。

論文が刊行された2013年1月22日、徳島県を通じて「徳島県阿南市で新種のカタツムリ発見」と題したプレスリリースを発行し、同日午後、記者会見を開催した。記者会見は阿南市、発見に関わった研究者およびその所属機関である徳島県立佐那河内いきものふれあいの里らによる共同で行われ、参加報道機関は新聞社4社、テレビ関連5社、通信社2社であった。その後、同22日から翌23日にかけて新聞、テレビ、ラジオなどで報道され、時事通信社や Yahoo! ニュースなどのインターネット・

ニュースとしても取り上げられた。2013年12月現在、把握できている報道実績は、テレビ5件、新聞4件、およびラジオ1件であった。

プレスリリースの内容 (阿南市 2013a) は、アナンムシオイガイの発見の経緯と特異点 (新種は徳島から30年ぶり、同属では6種目)、種名 (和名・学名) の由来、外部形態 (大きさや形)、生息場所とその環境、今後の保全の必要性和課題である。なお、研究者側から、これらの中で特に報道してほしいことなどの示唆的な方向付けはなかった。そして、これらを受けて報道された内容についても報道記事のタイトルや内容をみる限り、特に強調されて取り上げられたものはなく、おおよそ提供した情報が記事になっていた。

2. ブログを対象とした記事検索

新種発見のニュースに関する記事検索は、2013年1月22日の報道発表後、発見地域内外に広く浸透したと考えられた約10ヶ月後の2013年12月に行った。検索エンジンには Google と Yahoo を用い、検索ワードには「アナンムシオイガイ」を中心に、適宜「徳島」「新種」「発見」などを加えて最大限の収集に努めた。この収集にあたり本論の目的と合致しない Web サイトとして、報道機関 (新聞社、テレビ、ラジオなど) や公的機関 (行政、研究機関) の Web サイト、同一作成者が複数サイトを立ち上げ同一記事を掲載しているもの、掲示板書き込みの要約サイト (いわゆる掲示板 2ch のまとめサイト) があり、いずれも除外した。

検索されたブログ上での紹介記事 (以下、紹介記事) からは、サイト名、更新日、作成者居住地 (都道府県名、市区町村名)、記事内容を収集した。これらの項目から 1) いつ書かれたのか、2) 何についてどのような感情表現を伴って表現しているか、3) 内容と地域との関係を把握した。

ブログ検索の結果

1. 紹介記事はいつ書かれたのか?

紹介記事は、2013年12月の時点で合計68件見出すことができた (図1)。新種発見の共同記者会見を行った2013年1月22日には、すでに全国で21件 (68件の30.9%) の紹介記事が書かれた。翌23日に19件 (27.9%) とわずか2日間で40件 (58.8%)、7日間で53件 (77.9%) にのぼった。1ヶ月後には60件 (88.2%) となったが、その後は2013年11月まで散見される程度であった。

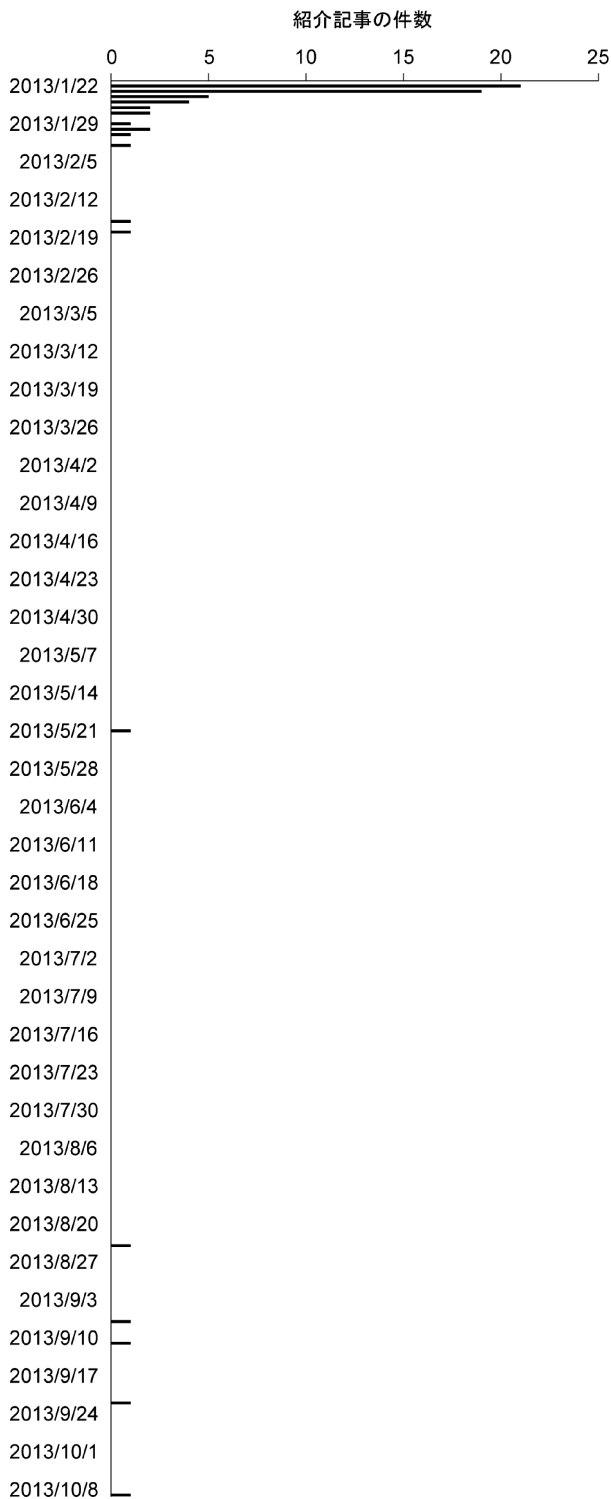


図1. 作成された紹介記事件数の経日変化。

2. 紹介記事はどのような内容だったのか？

検索された紹介記事には、報道資料の引用のみで個人的な感情表現が全く伴わない記事が20件（全68件の29.4%）、報道資料の引用の有無を問わず何らかの個人的な感情が書かれている記事が48件（70.6%）であった。後者の紹介記事には、1件のブログ当たりの平均感想数は1.5つで、最大4つがみられた。これらは書かれた感情表現から、次の4つ分類することができた。すなわち、

内容区分は新種発見に関する内容（以下、新種発見）、見つかった生物の形態・大きさに関する内容（以下、生物の小ささ）、その生物に対して自分がやりたいことに関する内容（以下、行動欲求）、およびこれら以外の意見（以下、その他）である。それぞれの内容区分の件数は、1つの紹介記事の中で複数について触れられているものがあり、新種発見25件、生物の小ささ23件、行動欲求6件、およびその他17件となった（表1）。なお、新種発見に対する批判的・否定的・懐疑的な意見など（例えば、開発ができなくなる、マニア・不審者がくるようになる）は、1件も確認されなかった。

ここで、それぞれの内容区分について具体的な表現をみていきたい。まず新種発見に関しては、「日本にもまだ新種がいたのか」「わくわくする」「誇らしい」など驚きや感嘆の気持ちが表現されていた。見つかった場所に触れて「阿南の名前がついて嬉しい」「徳島での発見が微笑ましい」などもあった。生物の小ささに関しては、「かわいい」「神秘的」「小さいのによく見つけた」「生き物かと疑うぐらいの大きさ」といった見た目の心象が驚きと共に表現されていた。行動欲求に関しては、「実際に動くところが見たい」「自分も探してみたい」といった感想があった。その他には「DNA解析技術の進歩を感じた」「これが新種だと考えた研究者がすごい」「地道な研究が発見につながったのだな」といった研究に関する感想や、「どこまで大きくなるのかな」「個体数が少ないので保護していく必要がある」といった生物自体への興味が書かれていた。

3. 紹介記事と地域との関係性

作成者の居住地に関する情報が書かれていた68件中の27件（39.7%）についてみると、やはり発見の当該県である徳島県が最も多く11件、つづいて東京都5件、および神奈川県・香川県・滋賀県が各2件であった（表2）。徳島県内では発見の当該市である阿南市が最も多く4件、徳島市が1件で、残り6件は未記載であった。このように作成者の居住地と紹介記事を書くこと自体の関係性は明確に認められ、自分に関わりのあるニュースであると捉えていた。

次に、紹介記事の内容について、徳島県居住者であれば物理的な距離が近いため行動欲求に関する表現、例えば「探してみたい」などが増えると想定した。しかしながら、行動欲求に関する表現は、徳島県居住者と県外居住者の両方から数件がみられ、内容区分に明確な違いは見出だせなかった。

表 1. 紹介記事にみられた感情表現.

内容区分	記事の内容（例）
新種発見	・ 小さな大発見。。。日本での新種発見……………誇らしいですね。。。 ・ まさか……………，徳島県で新種のカタツムリが発見されるとは思いも寄りませんでした……………（汗） 日本にもまだ，未発見の未知の生き物がいると思うとワクワクします♪ ・ へ〜〜！！カタツムリの新種がまだいたんですね！とビックリ（@□□@:）！！
生物の小ささ	・ こんな小さなカタツムリをよくもま〜見つけたものですね！ ・ 3.5ミリってめちゃくちゃちっちゃい。その小さいものを見つけた方にびっくり w ・ この微小と云える世界の中に，眼や触覚，内蔵が存在しているのかと思うと……………やはり，「自然の神秘」を感じます。
行動要求	・ 見る機会があれば，動くところを見てみたいですね。 ・ いいな。。。わたしもみつきたい。。。 ・ いつか，雨具を持って長靴はいて雨の徳島を探索に行きたくなった。
その他	・ 名前の中に「阿南」が入っているなんて自分が見つけたんじゃないけども，なんとなく嬉しい気持ちにさせてくれます。 ・ 小さいけれど大きな発見ですね。生息地が限られているのだから，絶滅させないように保護して欲しいです。 ・ ここ，よく通ってるとこの近くのな。下を向いて歩いてりゃなあ，見つけてたとしても新種だとは思わなかっただろうけどね

表 2. 作成者の居住地別の紹介記事件数.

地方	都道府県	紹介記事件数
四国	徳島県	11
	香川県	2
	四国のいずれか	1
北海道	北海道	1
関東	東京都	5
	神奈川県	2
	埼玉県	1
中部	長野県	1
近畿	京都府	1
	滋賀県	2
未記載		41
合計		68

考 察

本研究では，新種発見のニュースがブログの紹介記事を通じて不特定多数からどう評価され，どのような感情を伴い表現されたかを分析し，その受け取られ方を把握した。主な結果としては，紹介記事が7日以内で約80%が書かれており，記事の内容は新種発見への賞賛，生物の小ささへの驚き，行動欲求がみられた。それでは，一般市民は研究者・専門家が生み出した新種発見の成果をどう受け取ったのだろうか。ここでは，主な結果に沿ってみたい。

1. 紹介記事件数の推移

報道発表からわずか7日以内に約80%の記事が書かれていたことから，“影響の即時性”が高かったことが伺える。福原ら（2005）はウェブログ記事の出現数から社会

的関心を類型化している。このカテゴリに従うと，本事例は急激に記事数が増加する「突発型」に当てはまる。この突発型は，ある出来事に対して人々がその存在を予期しておらず，かつその出来事に強い関心を抱いている場合に生じるとされている。つまり，新種発見のニュースは，ある種の事件性に近い印象を与えたと同時に，新種発見という好奇心をそそるテーマであったと考えられる。一方で，その後に紹介記事の件数が急激に減少したことから，話題性や目新しさはあったものの，持続性は高くはなかった。

2. 紹介記事の内容からみたカタツムリに抱く先入観のズレ

薦谷ら（2011）は，科学研究に関して科学者・報道機関・一般市民がそれぞれ注目した部分は必ずしも一致しないと述べている。本種の発見の場合は，一般市民からどこが注目され，どのような関心が注がれたのだろうか。

紹介記事の感想には新種発見に関することが最も多く，その内容からは学術的な価値に対する好意的な感情が読み取れた。それと同等に取り上げられたのが，研究者側があまり意図していなかった生物の小ささに関する内容であった。陸産貝類などの分類学を専門とする研究者にとって，カタツムリには小さいもので殻径数 mm のミジンヤマタニシ *Nakadaella micron* から殻径約 60 mm に達するアワマイマイ *Euhadra awaensis* まで大きさに幅があることが，いわば“当たり前”と理解されている。しかし，一般市民が平野部の市街地周辺で通常目撃する在来のカタツムリは，セトウチマイマイ *Euhadra subnimbosa* をはじめとするオナジマイマイ科の殻径 20～30 mm 程度の種であることが多い。それに比べると本種

は殻径3.5 mm と相対的に小型であった。このため紹介記事に登場した多くの感想が「小さくて可愛い」「こんな小さいものよくみつけたね」などと意外性を持って語られる言葉であった。つまり、一般市民がカタツムリに抱く先入観、すなわち新種のカタツムリもおおよそ20～30 mm 程度のものだろうという考えから本種がズレていたといえよう。この明確でわかりやすい“先入観のズレ”が驚きとして受け止められたと考えられた。

3. 発見地との身近さによる受け取り方の違い

発見地である徳島県内外を問わず、新種発見に対する批判的な意見はみられなかった。むしろ、全体的な傾向としては新種発見への賞賛、生物の小ささへの驚きと捉えられていた。直接的に徳島県と関係がない作成者であっても、徳島県や阿南市に知人・友人がいる、あるいは阿南市を知っているという間接的な関係性とともて紹介する記事もみられ、自分との関係性を積極的に見出そうとするものが認められた。また、直接的／間接的のいずれも関係がない作成者であっても、この近代化した日本から未知の生物が発見された事実が誇らしいニュースとの捉え方があった。こうしたことから、本種の新発見に対する雰囲気としては、好意的・受容的態度であったといえよう。

本種は徳島県阿南市のみで確認される、いわば地域限定の固有種であった。このため、地域住民である徳島県民・阿南市民からは、発見地域外よりも踏み込んだ受け取り方がなされているのではないだろうか？次に、徳島県民・阿南市民の意見についてみていきたい。徳島県の作成者による紹介記事が11件とやや少ないものの、他地域からはみられなかった意見に「名前の中に「阿南」が入っているなんて自分が見つけたんじゃないけども、なんとなく嬉しい気持ちにさせてくれます」があった。これは発見地が阿南市だったという親近感を感じる以上に、名前がついたことで何らかの一体感を持って受け取られている様子が伺える。

一方で、これまで関わりのなかった生物と地域住民とが新たな関わりをどのように見出していくかを考えた場合、新種発見のニュースだけでは地域住民からの仲間意識、あるいは地域の一員というほどの深化した受け取り方に至らないだろう。これは、本種の生息場所が人々の生活圏から離れた山間部であること（阿南市 2013b）や、殻径が3.5 mm 程度である視認性の低さといった愛玩性の関与も否定できない。しかし、地域住民にとっては日常生活で食べたり、遊んだり、使ったり、といった関わりがなかった上に、有益・無益かもまだわからない

未知の新種であることが直接的な要因と捉えるべきであろう。新種が発見されたという話題性のみの限界である。ただし、現在では本種を小学校や中学校の教育資源（阿南市 2013c）として利用したり、カタツムリをモチーフにスイーツとして販売する産業資源（阿南市 2013d）と捉えた動向もあり、新しい関わりが芽吹きつつある。こうしたことから、今後、本種が“多目的に利用できる資源”として地域住民から認知されることで、新しい関わりが醸成されていく可能性を指摘しておきたい。

謝 辞

アナンムシオイガイの発見者である香川県観音寺市の矢野重文氏、香川県東かがわ市の多田 昭氏、および徳島県阿南市の河野 光氏には発見の経緯について貴重な情報をいただいた。新種発見の共同記者会見に際しては阿南市と徳島県の協力を得た。ここに深甚なる謝意を表す。本研究の一部は、平成24年度公益信託タカラハーモニストファンド、および平成25年度笹川科学研究助成によって実施された。

摘 要

徳島県で新種として発見された陸産貝類アナンムシオイガイは、これまで地域住民には全く知られていなかったため関わりがなかった。本種発見の報道発表後に、そのニュースが誰によってどのように語られたのかをインターネット上のブログ記事を抽出・分析することで、一般市民の受け取り方を明らかにした。その結果、ブログ記事は約7日間で約80%が作成され、その内容には批判的・懐疑的なものはなく、新種発見への賞賛、生物の小ささへの驚き、探してみたいという行動欲求として語られていた。こうした感情表現から、本種の新発見は発見地域内外を問わず好意的・受容的であったといえる。また、本種の大きさが一般市民のもつカタツムリの先入観からズレていたことから高い話題性を示した。なお、本種が徳島県だけで確認されており、種名に発見地名を冠していることが、地域住民にとってある種の一体感を持って受け取られていた様子が伺えた。

キーワード アナンムシオイガイ、先入観のズレ、多目的利用、地域住民、ブログ、報道発表

引用文献

- 阿南市（2013b）加茂谷は、カタツムリのパラダイス！。広報あなん，7: 2-9。
阿南市（2013d）阿南市発！カタツムリスイーツで地域活性化と環境保全を図る。広報あなん，11: 17。

- 福原知宏・村山敏泰・中川裕志・西田豊明 (2005) ウェブログ記事を用いた関心解析システム. 人工知能学会全国大会 (第19回) 論文集. [<http://www-kasm.nii.ac.jp/jsai2005/schedule/pdf/000171.pdf>] (2013年12月1日)]
- 本田裕子 (2006) 農業従事別によるコウノトリ放鳥の捉え方の違い—兵庫県豊岡市における放鳥直後のアンケート調査から—. 農村計画学会誌, 25巻論文特集号: 293–298.
- 本田裕子・山路永司 (2006) 農業者の視点からみた野生生物保護—豊岡市コウノトリの野生復帰を事例に—. 農村計画学会誌, 24(4): 237–244.
- 石野亜耶・難波英嗣・竹澤寿幸 (2010) 旅行ブログエントリから観光情報の自動抽出. 知能と情報, 22(6): 667–679.
- 伊藤いずみ・曾和治好 (2010) ブログからみる日本庭園の評価. ランドスケープ研究, 73(5): 377–380.
- 松岡崇暢 (2009) 農業用水路の継続的な維持管理に向けた取り組み—NPO との協働による維持管理の展望—. 農村計画学会誌, 27巻論文特集号: 161–166.
- 三浦麻子・松村真宏, 北山 聡 (2008) ブログにおける作者の指向性と内容・コミュニケーションとの関連. 心理学研究, 79(5): 446–452.
- 農林水産省 (2010) 生きものマークガイドブック: 考えてみませんか? 私たちと生きものたちのつながり. 農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課, 東京, 19 p. [http://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/s_ikimono/guidebook/index.html]

[maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/s_ikimono/guidebook/index.html](http://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/s_ikimono/guidebook/index.html)]

田代優秋 (2013) 10年後の水路は誰が守っているのか?. 農業農村工学会誌, 81(11): 56–58.

葛谷 匠・安藤康伸・飯田有希・井上志保里・貴船永津子・小寺千絵・近藤菜穂・猿谷友孝・豊田丈典・中村史一・宮武広直・渡邊俊一・横山広美 (2011) iPS 細胞のインパクトは社会にどのように受けとめられたか—科学研究に対する科学者・報道機関・人々の注目の違い. 科学技術コミュニケーション, 9: 23–34.

Yano S, Tada A, Matsuda H (2013) A new species of *Cipangocharax* (Caenogastropoda: Cyclophoridae: Alycaeinae) from Tokushima Prefecture, Japan. *Venus*, 71: 29–37.

付 記

阿南市 (2013a) 徳島県阿南市で新種「アナンムシオイガイ」を発見. 阿南市ホームページ. [<http://www.city.anan.tokushima.jp/docs/2013021300026/>]

阿南市 (2013c) みんなでカタツムリを探しに行こう! 吉井小学校で出前授業. 阿南市ホームページ. [<http://www.city.anan.tokushima.jp/docs/2013102200153/>]

(2014年3月11日受理)